

コラム：千歳川の捕魚車120年の移ろい

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産研究・教育機構 公開日: 2024-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野川, 秀樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2009653

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



コラム

千歳川の捕魚車 120 年の移ろい

の が わ ひ で き

野川 秀樹（北海道区水産研究所）

表題の聞き慣れない文言「捕魚車」。この捕魚車による漁法をアメリカで実見し初めて日本に紹介したのが伊藤一隆で、明治 23 年のことです（北海道庁第二部水産課 1890）。そして、藤村信吉が明治 29 年にこれを千歳川のサケの捕獲に実際に用いることを創案します（北海道鮭鱒保護協会 1938）。両者はいずれも我が国のさけます人工孵化放流の歴史に大きな足跡を残した人物です。

捕魚車の設置から 120 年、千歳川では現在でもサケを水車ですくい上げる方法によって捕獲が行われています。今では馴染みのない言葉となった捕魚車、原名の Fish Wheel をこのように訳したのは伊藤一隆で、この邦訳は水車の漁法を簡潔かつ的確に表現した名訳との評価もあるところですが（山田 1992）、昭和 46 年頃



図. 昭和 42 年の千歳川の捕獲場。

からインディアン水車の呼称が広まり定着していくことになります（秋庭 1988）。このたぐみな漁法やインディアン水車の呼称と相まって、今や千歳市の重要な観光資源であり、サケの遡上シーズンには多くの観光客が訪れます。

裏表紙写真は明治 33 年から現在に至るまでの水車の姿を並べたものです。設置後間もない明治 33 年頃の写真には、水車の取付けや解体等に使用する架台は見当たりません。いつ頃から架台が設置されるようになったのか、写真からは少なくとも明治 44 年頃には設置されていたことが分かります。明治から大正期における架台はやや細身で高く、側面には昭和 25 年頃以降の架台には見られない数本の梁が見られます。水車本体の構造は、ほぼ原形を大きく変えることなく現在に至っています。120 年間回り続けてきた水車、さけます人工孵化放流が続く限り、これからも回り続けることでしょう。

今回、水車の変遷を辿る中で、「水車が設置されない年があった」というあまり知られていない事実に出会いました。それは昭和 41 年と昭和 42 年のことです。図は昭和 42 年の捕獲場の写真ですが、ウライ（親魚の遡上を遮断するために河川を横断して設置する柵）と捕獲槽（ウライの一部を開けて、そこを通過した親魚を捕獲するための装置）は見られますが、水車は設置されていません。当時の資料（北海道さけ・ますふ化場 1967）には、河川切替による河床低下と塵芥類の河川投棄の増加等により、捕魚車の回転を維持することが困難なことから使用を中止した、とその理由が書かれています。一方、「捕魚車について」（武田重秀 1967）には、「明治 21 年から 77 年間廻り続けてきたが、サケ遡上数の減少により捕魚車を使って捕獲するまでもないとして使用されなくなった」とあり（筆者注：設置は明治 29 年ですので、正確には 77 年間ではなく 69 年間ということになります）、サケの減少が使用中止の理由として記述されています。千歳川で孵化放流事業を実施していた当時の北海道さけ・ますふ化場の関係者に話を聞いたところ、やはり上述した千歳川の環境変化に加えて、遡上数の減少も中止の背景にはあったとのことです。なお、昭和 43 年には再び設置され、以後は途絶えることなく毎年設置されています。長い歴史の中の出来事として、書きとどめておく必要があります。

裏表紙の写真は、①は当所所蔵の「千歳鮭鱒人工孵化事業報告」（北海道庁水産課 1900）から、②は北海道立文書館所蔵の「東宮殿下行啓記念」（北海道庁 1911）から、③は北海道大学附属図書館北方資料室所蔵の「千歳捕魚車（疋田写真コレクション No. 4145）」から転載しました。北海道大学附属図書館及び北海道立文書館には写真の接写や本誌への使用許可についてご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。なお、それ以外は当所所蔵の写真からです。

引用文献

秋庭鉄之. 1988. 鮭の文化史. 北海道新聞社, 札幌. pp. 92-112.

疋田豊治. 1916. 千歳捕魚車（疋田写真コレクション No. 4145）. 北海道大学附属図書館北方資料室.

北海道さけ・ますふ化場. 1967. 西越採卵場において捕魚車を捕獲槽に変更した理由. 昭和 42 年度事業雑件綴, 件番号: 7.

北海道鮭鱒保護協会. 1938. 千歳孵化場五十周年記念號. 鮭鱒彙報, 38: 1-115.

北海道庁. 1911. 鮭捕魚車. 東宮殿下行啓記念, 北海道庁, 札幌. p. 64.

北海道庁水産課. 1900. 捕魚車運転の景. 千歳鮭鱒人工孵化事業報告, 北海道庁, 札幌. p. 86.

北海道庁第二部水産課. 1890. 米国漁業調査復命書. 北海道庁, 札幌. 285 pp.

武田重秀. 1967. 捕魚車について. 魚と卵, 124: 33-34.

山田 健. 1992. 千歳川の捕魚車の発達に関する若干の考察. 北海道開拓記念館調査報告, 31: 131-145.